

9/25

ニエモエクニラット

No.310

民主主義学生同盟
市大支部機関紙 9/25

安保破棄、非武装中立の 現実的根拠は何が？

共労党市大支部
機関紙「スバル」
「フスル」批判

1 反戦勝利、中絶反戦、安保破棄、佐藤内閣打倒をめぐり即ち、10月選挙と連年の最大の焦点として、新しい段階を巡っている。10月選挙の意とは、トナリに於る米帝の後進とそれに加害する佐藤内閣に一尺の打撃を与え、中絶反戦、安保破棄即ちの展望を切り拓く点にある。

それ故に、我同盟は、安保破棄、中立日本の実現にいたる展望を全受友の前に提示し、即ちの方向性を明らかにしてきた。この我々の見解に対して然否として、権重派（山平和共存派）を自任しながら増々オトリツキでムへの傾向を強めている共労党派（「統一会」）なら、かつては共通の立脚点であった「非武装中立」論を中心として攻撃が開始されている。その批判たるや、彼らが批判している論者の主張を正確に理解する能力さえないことを毎行示している稚拙な「キホー」的批判であり、そのような「批判」に當る義務は本来われわれにはないが、偏向が平和共存派の一部から発生していることでもあり、再度われわれの見解を反批判の中で明らかにしたい。

2 キホーに彼ら共労党派は、単なる「安保条約反対」ではなく、「反安保体制」であり、単なる「政策転換」ではなく「日帝の支配体制の支柱をつきこぶすい」でなければならぬと問題を対置する。われわれは言葉の遊戯をしている程暇ではないから問題を端的にだそう。われわれと彼らの相違は「単なる政策転換」が、日帝の支配体制の支柱をつきこぶすいかにあるのではなく、安保破棄、中立日本への展望をいかに切り拓いていくかにあるのだ。いかにして「新しい政府危機、政治危機」を創りだすかが問題になっている時に「新しい政府危機、政治危機」をもつてしか勝利しないのである。と叫ぶことに何のいみがあるだろうか。

3 具体的述べよう。われわれは、客観的には人民の団結と統一への条件が成熟していながら運動は依然

として分断され、統一戦線は理論上の試論でしかない現段階で、斗いの方向性について正々しているのである。日米階級同盟としての安保条約は、日本帝国主义がいかなる情勢の要請の中にも、米帝がアジアでどれほど右進し敗退しても「政治生命をかく、維持し強化」しなければならぬのかどうか、日帝支配内部には、二の矢について意見の分岐はありえないのかどうか——

——オーの問題はこの矢にある。
詳細は同盟機関紙「民主主義」の「No. 5」に譲るが国際通貨危機の下で成熟しつつある日米帝国主義同盟は、今日の日米階級同盟の基盤を不断に振り崩している。しかも、東南アジアに於ける独自の市場開拓を自己の基本戦略とする日帝は、米帝のベトナム侵略退、敗北の歴史的過程を目前にして、一方その政治階級同盟の強化によって右進過程を押しとぎめようとする部分を生み出しながらも、その内部には深刻な動機を含んでいる。自民党総裁公選を巡る動きが活発化しているのは、かかる状況に深刻な規定されているためであり、その矢を明確にせずには理解しえない。侵略と戦争の佐々内閣に打撃を集中し、彼が内部の分岐を拡大し、最も反動的な部分を孤立させること——この矢こそオー段階の斗争の展望であり、具体的に存在している二の展望を大胆に提起し、二の展望運動の二つの成果を定着させる中では、はじめに運動は更に強化され、統一戦線は前進するのである。日米階級同盟を運命共同体と捉え、二の矢については佐々内閣に基本的対立はないとする共労党派の見解は、日本共産党へ代々木への従属論と一体と二を区別されるのだろうか。

(うらへつる)